第７章
サウナのまち

サウナのまち
豊後大野
BUNGO ONO

サウナのまちロゴマーク

1.「おんせん県なのに、温泉がない」

大分県といえば、多くの人が「温泉」を思い浮かべます。

しかし、豊後大野市には温泉がありません。

「おんせん県おおいた」にありながら温泉がない。

一見すると観光にとっては弱みとも思えるこの特徴を、逆に地域の魅力にできないか。

そんな発想から、新たな取組が始まりました。

2. 豊後大野には、「ととのう」ための自然と伝統がある

豊後大野市には、温泉とは違う貴重な財産があります。

山、川、滝、豊かな森林、清らかな水。

また、地域には昔から「石風呂」と呼ばれる独自の入浴文化が根付いてきました。

溶結凝灰岩の岩壁に穴を掘り、「石菖（セキショウ）」などの薬草を炊き上げて体を温める伝統的な風呂として知られ、自然の恵みを活かした暮らしの知恵のひとつです。

こうした背景を踏まえ、注目されたのが「サウナ」でした。

サウナで体を温めた後、豊かな自然の中で外気浴を楽しみ、川や滝のそばで自然と一体になるひとときを過ごす。

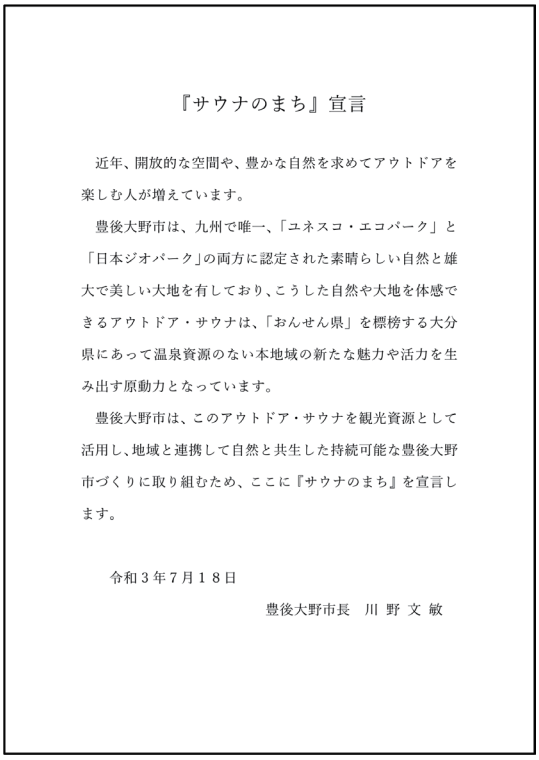
街中のサウナとは異なる、「自然の中で楽しむサウナ」という豊後大野ならではのスタイルが、伝統と現代性の融合として少しずつ形になっていきました。

3. 民間の取り組みから「サウナのまち」へ

豊後大野市内では、地域の事業者がそれぞれの場所や自然環境を生かしたサウナづくりに取り組み始めました。

各施設の個性に加え、豊後大野の豊かな自然そのものがサウナの魅力となり、サウナを目的に訪れる人も増えています。

こうした民間の動きを地域全体の観光振興につなげるため、市も「サウナのまち」を宣言し、情報発信や事業者との連携など、サウナを活用した地域づくりを推進しています。



『サウナのまち』宣言

近年、開放的な空間や、豊かな自然を求めてアウトドアを楽しむ人が増えています。

豊後大野市は、九州で唯一、「ユネスコ・エコパーク」と「日本ジオパーク」の両方に認定された素晴らしい自然と雄大で美しい大地を有しており、こうした自然や大地を体感できるアウトドア・サウナは、「おんせん県」を標榜する大分県にあって温泉資源のない本地域の新たな魅力や活力を生み出す原動力となっています。

豊後大野市は、このアウトドア・サウナを観光資源として活用し、地域と連携して自然と共生した持続可能な豊後大野市づくりに取り組むため、ここに『サウナのまち』を宣言します。

令和３年７月１８日

豊後大野市長　川 野 文 敏

サウナのまち宣言書


「サウナのまち」宣言（令和3（2021）年7月18日）

「サウナに入るために豊後大野へ行く」

これまでにはなかった新たな人の流れが生まれています。

4．豊後大野のサウナは、「自然」が主役

豊後大野のサウナの最大の魅力は、サウナ室そのものだけにとどまりません。

サウナで温まり、自然の中で外気浴をする。

目の前に広がる山々。


せせらぎに包まれた外気浴

耳を澄ますと聞こえてくる川のせせらぎ、季節ごとに変わる空気や景色。

こうした「自然の中で過ごす時間」そのものが、豊後大野のサウナ体験です。


水風呂は目下の清流

そして、サウナの後は地域の食を味わい、市内を巡り、宿泊することで、豊後大野の多彩な魅力も楽しめます。

5.「ない」からこそ生まれたもの

温泉がないことを嘆くのではなく、

「温泉がないなら、別の方法で豊後大野の自然を楽しんでもらおう」

この発想の転換が、「サウナのまち」という新しいブランドにつながりました。

これは、豊後大野市が持つ自然環境という資源を、新しい時代の観光ニーズと結びつけた取組でもあります。

ジオパークやユネスコエコパークで大切にしてきた「大地」「自然」「人の暮らし」。

その豊かな地域資源が、サウナという新たな切り口によって、これまでにない魅力として発信されています。

合併から 20 年。

豊後大野市は、地域に「ないもの」を数えるのではなく、「あるもの」を見つめ直し、新しい価値を生み出しています。